

〈資 料〉

阿部次郎兄弟らへの長姉からの書簡

——キリスト教との関連——

森 川 甫

『三太郎の日記』の著者、大正期の教養派の代表者、阿部次郎¹⁾は、出家してキリストに従い、清貧に生きるフランシスの聖なる愛の生涯に深い憧れを抱きつつも、その模範には従いえないことを痛感し、「愛せんとした懸命の努力の中にトルストイの生涯の意義」を見出している。「もとより俺はいまだ『偉大にして光栄なる神よ、我が主耶蘇キリストよ』と呼ぶことを許されていない。さうしてこの祈りはいつ聴かれるかわからない。この祈りが聴かれた後になっても、フランシスのやうに使徒として伝道者としての自覚が授けられるかどうかもわからない。しかしこの祈りが一生聴かれないならば、俺は一生このことを祈り通すのみである。もし伝道者としての自覚を授けられないならば一生隠者として神に祈り通すのみである。さうして隠者の生涯を記録して、人類に対する愛を幾分なりとも実現するのみである。とにかく、俺はこの祈りに生きることの外、自分を真正に活かす道を知らない。」²⁾と心情を吐露している。

こうした次郎のキリスト教との最初の接触は、故新関岳雄氏の指摘された³⁾ごとく、幼児、祖母わか⁴⁾をとおしてなされたのであった。『三太郎の日記』の冒頭の「断片」において、次郎は次のように書いている。「俺はローマ旧教の伝説中に養われた祖母に育てられて、北国の山村に成長した。山村の夜はとりわけ寂しく、静かであった。この寂しく静かなる山村の夜々に、桃太郎、カチカチ山の昔噺と共に俺の心に吹き込まれたるものは、天国煉獄地獄の話であった。俺は幼心に自らの未来を推想して、到底直ちに天国に登るを許さるべき善人だとは自信し得なかった。俺は地獄と煉獄との間にかかる自分の魂に、成年の感じ得ざる新鮮な恐怖を感じていた。特に最も気がかりな

のは、煉獄の長い修煉により罪の浄めも了えて天国に送られる際に、呵責の血に汚れたる手足を洗うべき水の流れのあるなしであった。俺は夜中に目をさましてその事を思出すとたまらなかった。そうして傍に眠っている祖母を揺り起こしては、よく泣きながらこの問題の解答を求めたものであった。」⁵⁾

わか⁶⁾の2人の弟、竹岡滋松⁶⁾、堀礼治⁷⁾はカトリック信者であった。次郎兄弟たち⁸⁾、また、その長姉ます⁹⁾の母、ゆき¹⁰⁾も熱心なカトリック信者であった。ますも祖母わか⁶⁾、母ゆきやこの2人の大叔父の影響をもっとも強く受けたのであろう。弟の三也¹¹⁾とともに、きわめて強いキリスト教信仰を持つようになった。そして、家族をキリスト教信仰に導いている。本書簡には、ますのこの強い信仰がよく表われている。

この書簡は和紙に墨書されており、長さが2.78メートルもある。差出人は、阿部富太郎¹²⁾とゆきの長女、次郎兄弟たちの長姉、加藤ますである。宛名は、「祖父母」の阿部七郎右エ門¹³⁾、わか⁶⁾の、両親の富太郎、ゆき、次郎たち兄弟とその夫人たち、合計、14名におよんでいる。差出しの年は「和歌子¹⁴⁾の三周忌」とあるから、大正8年であり、日付は「5月27日」と記されている。昭和43年2月11日、阿部一郎の長男、阿部襄¹⁵⁾は、加藤ますの長女、前田貞子¹⁶⁾宛に次のような手紙を書いている。「さて、今日、土蔵の昔の手紙など整理してありましたら、加藤儀藏様、おます伯母上様の手紙が出て参りました。この手紙は、私が所蔵してもよいのですが、御届けして、御所蔵頂いた方が宜しいかと思ひまして、御送り申し上げます。・・・(中略)・・・伯母上様のことが、よく、しのばれます御手紙でありますので、私するに、しのびま

んみつ子ちゃんを大さう大きく
ふられてよいお嬢様と成るわや
た是をやん富士雄ちゃんを大き
く成るす大さうえうさうさ
や成りてお末たりもう思ひます
叔祖母上様も富士雄様の叔母
様と一いゆみ神戸迄出で
下ると大さうよかつたのですたけれ
ども東京から出陣して成りし
て惜い事を致しまた又さうお
を見て世の世見物も出で成り
頂きお世にまつる時の来られを
楽しんで侍て居ります 祖父母
上様や父母上様も此か
お望いおせんでしるわ子叔当
地もこう成てからいふふいふさびし
成るわやすたでしよと思ふに居り
す八町の家でも皆様此大さ
うに成すたかどうです 私を
一何かさうふくわが様でをたらい
て居りますわ子叔を名の風引
やすたお心配致しすたけれ
此迄を大さう成てきさうに成

毎日学校へ出で居ります 私をわ
子叔とすをらうて合ひますた
いさやせて居りますを 叔母
己れふやうに見へますわ子叔
涙をこぼしやすたに成りて
妹のいこふかたけと成るもの
をさすやうなおれき私をわ
あなしたと又此妹を之れに
神様がわいとひ下さいます
を深し 感謝し奉ります
いさや之れを後にも体
よりいさや者と成ります
そて神様の思ひをかい
やうな長い職務の為
そたらあせし頂きますやうに
けい道引下さいますやうに
お祈りなされやすたに成る
お望いさうでん 大さう成
やうだとわ子叔を云て
教會も皆でいさんで
お祈りをし日曜日はわ子叔
の腰いたいと云て居ります
も末のわ子叔とわ子叔の
前の日曜よりわ子叔

しては日曜日をわ子叔と思ひて
皆てわ子叔を買物したり
むこうさうさうさうした
わ子叔腰いたいのをさう
しかりふさうさうさう
日からしうあり平温に成り
やすたわ子叔をほん
會の説教をきくと
り難すわと云て居ります
やふつる度さうさうわ子叔
後陣する時をさうと父母上
をわ子叔をせ中をさうさう
思ひますやうに成りてわ子叔
らふいで楽しめて侍ら成
居る下さる母上様を
お養生遊んでお世に
やうに成りてわ子叔を成
くいさうなを成りてさう
とめて居りますわ子叔を
高いで思ひますわ子叔を
料も母や主人を頂いて
中をさうわ子叔をさう
さうさうさうさうさう
わ子叔をさうさうさう
で目 様内さうさうさう
やすたわ子叔をさうさう

上より石川様の事を昔からの
先生の家でもありしれ子殿も
取て居るから大いにおふた
ふかき田舎でもなまきりて見
すたれ子殿も当人とよくこ
ふておもやみですからもし余
四男殿様を知て居りしやう
とやて居りしやうからもしこ
う教て下い足様方の所存を
いふて何の上です
和歌子の三週子も成りやうた
月事をも忘りてすけれを余
暑くおつて困りやうから六
月の和歌子誕生日より新家
の金倉を催しつゝおふた
孝(やす)歌もつかたですう
次郎殿様も我をそれ入すけ
れども六月五日の前日にふ
よこて下さいお上りやう
いとこを父の所神をわやま
れ固よすひ給ひしそりとも
おふたふたふたふた
あしをいれさうかられれ
秋風堂も秋やいそとせつ
以恵のつゆさうあられれ
涙とせよた(や)し涙とせ
るを皆様梅雨も近きやう

かうは角は身体は大切な
中より母や主人よま
てんれとやれやう
青葉三三
ます
祖父母上様
末葉おから
孫にげ代様
やし代様
宜しくお上り下
さいれお上
りやう
次郎殿様
おふた
つね子殿様
三三殿様
九重殿様
余男殿様
八重子殿様
勝也殿様
勝子殿様
勝也殿家の所を教て下さ
祖父母上様(もと)と中上男松
嶺でキリスト教の所であつた
時をともめさうかきやう
成して下いさいて悪い
ありやせん必だよいふ
ありやせんお上りやう
本町の家より本家様さ
た様(もと)

青葉しげりて 早夏らしき景色に
なりました 先日(19)はつね子様¹⁹⁾ 御病氣
成されます由 何程か御困りなさいまし
たでしょうと かげながら御さし申上(げ)て
居りながら 礼子殿²⁰⁾きます(し)て嬉しい
やら 風引(き)にかかれて心配やら 又
私も少し風引(い)たり致しまして 思ひ
ながら御伺ひも申上げず 意外の御
無沙汰致しますすみませんでした
又 此(の)頃に皆様の御写真²¹⁾とつぜん送
り下さいまして びっくりして拝見しまし
たら 四、五十年来 待ちにまたれし
祖母上様²²⁾ 時来にけりと 色めきて
老いの顔にも 花やかなる喜びをう

かべられ四人の兄弟姉妹²³⁾にぎや
かに花のような子供方²⁴⁾沢山ならびま
すたので 目がまだふやうに覚えますた
誠に御なつかしい御姿に 誠に御目
にかかったやふな心地致しますた 大そう
嬉しく感じました 殊に余四男殿²⁵⁾は
何か物言ふとして居るやうです 皆
様の御かけ様で勝也殿²⁶⁾の結婚も
とどこおりなくすみまして 深く深く
御礼申上(げ)ます 天国に居られる伯
父母叔父様も何程か御悦びに成
りて居られます事でしょう 私共も
心から悦(ん)で居りました 「何(どう)ぞ両
人様とも御丈夫でなるべく長く長く神

様の御心にかなうはたらきをさせて
頂きますて末々までも 竹岡家²⁷⁾の栄
を得られますように 御祈(り)して居り
ました 御笑いぐさに一つ書きました
何(どう)か なを(お)してよこして下さい

「竹岡にときわの松の

いろそいて

千代を寿く(ぐ) 田鶴も

まふらん」

「いもとせのちぎりを

とわにかはらじと

とこ世の春の

花のあしたも」

つね子様も先々御丈夫に成られ
ますて 大そう悦(ん)で居りました 和子
ちゃん²⁸⁾ 三重子ちゃん²⁹⁾ あや子ちゃ
ん³⁰⁾ みつ子(みち子)ちゃん³¹⁾は大そう大きく
なられてよい御嬢様に成られまし
た 晃ちゃん³²⁾ 富士雄ちゃん³³⁾は大き
く成りますて大そうえらそうに
成りて行く末たのもしう思います
ね 祖母上様は斎藤様³⁴⁾の御母
様と御一緒に神戸³⁵⁾迄御出で
下さると大そうよかったのですたけれ
ども 東京から御帰へりに成りまし
て惜しい事を致しました 又よき折
を見て ぜび御見物に御出でに成(っ)て
頂き度 御座います 其(の)時の来るのを
楽しみして待(っ)て居ります 祖父母
上様や父母上様も御かわり
御座いませんですか 礼子殿当地
にこられてからどんなに御さびしく
成られますたでしょうと思って居りま
す 八日町³⁶⁾の家では皆々様御丈夫
で居られますたかどうです 私共は
一同かわりなく 御かげ様ではたらい
て居ります 礼子殿は先日風引
(き)ますた折 心配致しますたけれども
此頃は丈夫に成ってきますて 悦(ん)で
毎日学校に出て居ります 私は礼
子殿と す(し)ばらくで会いましたか

どうもやせて居りますて 誠にあ
われなやうに見へますて心の内に
涙をこぼしますた 「此(の)あわれむべき
妹のいく分かたすけと成る事の
出きますやうに よわき私共に力を
あたへたまへ 又 此(の)妹を此(れ)迄
神様が御しくひ(すくい)下さいますた事
を深く深く感謝し奉ります
どうぞ之より後も心も体も
ますますつよい者と成りますやうに
そして神様の思召しにかないます
やうに 長く長く職務の為によく
はたらかせて頂きますやうに 御たし(す)
け御道引下さいますやうに」と毎日
御祈(り)して居りますた 此頃は土地
が合いそうで だんだん丈夫に成る
やうだと礼子ちゃんも言うて居ります
教会³⁷⁾にも皆でいさんで行って居り
ます 先日の日曜日に礼子殿風引(き)
の後 腰いたいと云って居りました 私
も未だ少しねつとれないのですけれど
前の日曜日に行きかねます(し)たから 何(ど
う)か
して此日曜日には行(き)度と思ひて
皆で行きますて買物したり づいーと(ずっと)
むこう迄まわりてきました それでも
礼子殿腰いたいのも そのよく日から
しっかりなを(お)りてしまいますた 私もその
日からしっかり平温に成りなお
りました 礼子殿もほんとうに教
会の説教をきくと気がつよくな
りますねと申(し)て居ります 私は此(の)
やうな事たびたびあります 礼子殿此
後 山形へ帰る時にはきっと父母上様
を御悦ばせ申(す)事できるだろうと
思いますから 決してご心配なさ
らないで楽しみして御待ち成って
居りて下さい 母上様は誠に十分
御養生遊ばして 御丈夫で居らるる
やうに願ひ上げます 礼子殿へは成るべ
くじよう分を取らせるやうにとつ
とめて居りますけれども 何分物が
高いので思うやうに出きません 食

科（費）も母や主人は頂いては悪いと申しますけれど 私も出ることならもらわない方よいと思ひましたが何分暮らしの方が困りますので一ヶ月拾円づつもらふ事に致します 何（どう）ぞ御ゆるしを御願申上げます 石川様³⁸⁾の事は昔からの先生の家でもあるし 礼子殿年も取って居るから大ていの事なら仕方ないかと思ひますて 色々きいて見ました 礼子殿は当人をよくわからなくておもやみ（なやみ）ですから もし余四男兄様が知って居りはしまいかと、申（し）て居りますから もしわかるなら教へて下さい 兄様方の御考へはどうか 伺ひ上（げ）ます 和歌子の三周年に成りました七月廿日は忌日ですけれど 余り暑くなりて困りますから 六月五日の和歌子誕生日に私の家で記念会を催し事に致（し）ました 私の考えました歌ともつがずですが 何（どう）か次郎殿御手かじ（ず）を（お）それ入りますけれども 六月五日の前頃迄 なを（お）してよこして下さい 願上（げ）ます

「いとし子を父の御神は かがやきの御国にすくい給ひし そのを（お）もかげのうつろひて朝な夕なにうかびつつ はや三年となりにけりあとしたい はらからの

御教へのもとに入りしより秋風寒き我（が）やども

とこ世の春をもあをぎ見る御恵みつゆにうるおいし

御手のみわざのかしこきに涙と共にたたへまし 涙と共にたたへまし」

何（どう）ぞ 皆様梅雨も近（づ）きましたから 御折角御身体御大切に御願申上（げ）ます 母³⁹⁾や主人⁴⁰⁾より宜しく申上（げ）てくれと申されました

五月廿三日 ます

祖父母上様 ⁴¹⁾	末筆ながら斎
御両親様 ⁴²⁾	藤しげ代様
一郎様 ⁴³⁾	やし代様も
おしを様 ⁴⁴⁾	宜しく申上（げ）て下
毎度ざっし	さいませ 御願申上
次郎様	ありがとう （げ）ます
御座います	何（どう）ぞ御手かずお
つね子様	それ入（り）ますけれ共
三也様	此の乱筆にてやうや
九重様 ⁴⁵⁾	く一本書きましたの
余四男様	ですからだんだん
八重子様 ⁴⁶⁾	と御まわしを御願（い）
勝也様	申上（げ）ます
よし子様 ⁴⁷⁾	御一同様どんなに御
	笑ひに成るか知れま
	せんね 私も書（き）なが
	ら笑いました
	御めん下さい さようなら

勝也殿 家の番地を教へて下さい

祖父母上様へも一こと申上（げ）ます 松嶺⁴⁸⁾で基督教の御話あった時はつとめてどうかきくやうに成して下さい きいて悪い事はありません 必ずよい事があります ふして願上（げ）申します 本町の家⁴⁹⁾にも本家様⁵⁰⁾きたえ様へも宜しく

五月十八日の日曜日 一同打つれて須磨の浦 舞子のはま明石迄遊びに行きて たへなる景色を見て礼子殿也大そう喜びました 主人 私 貞子 静子⁵¹⁾ 徳子も行きました⁵²⁾。

（ ）は筆者の補筆



阿部 晃
(次郎長男)

阿部 次郎

阿部 和子
(次郎長女)

竹岡 勝也

竹岡 芳子
(勝也妻)

堀 三重子
(三也長女)

堀 三也

阿部 わかの
(祖母)

堀 綾子
(三也次女)

斎藤 志けよ
(阿部八重竹岡芳子母)

阿部 余四男

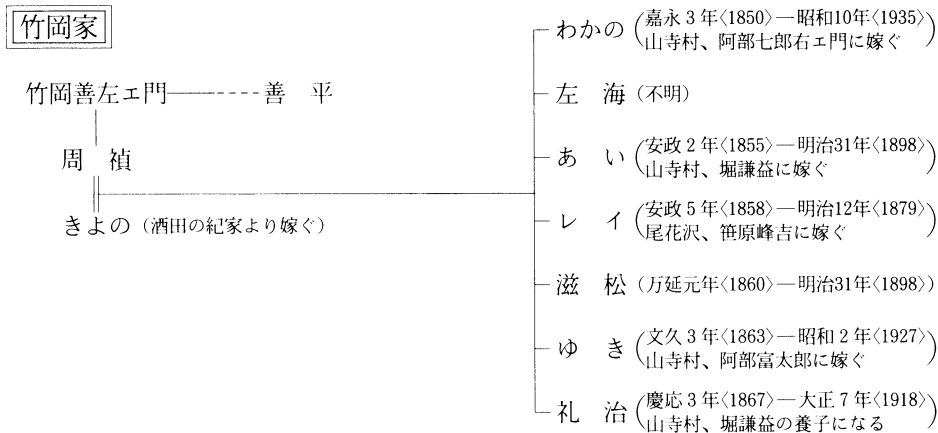
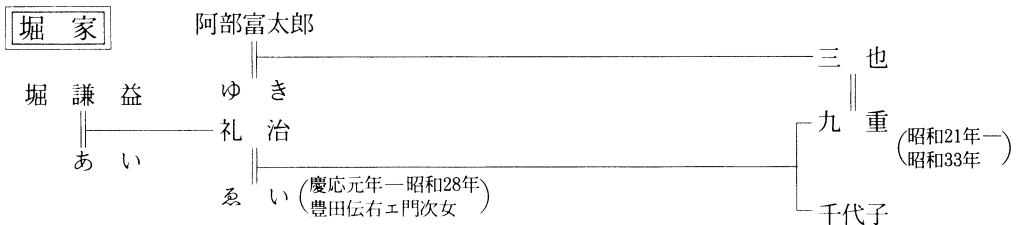
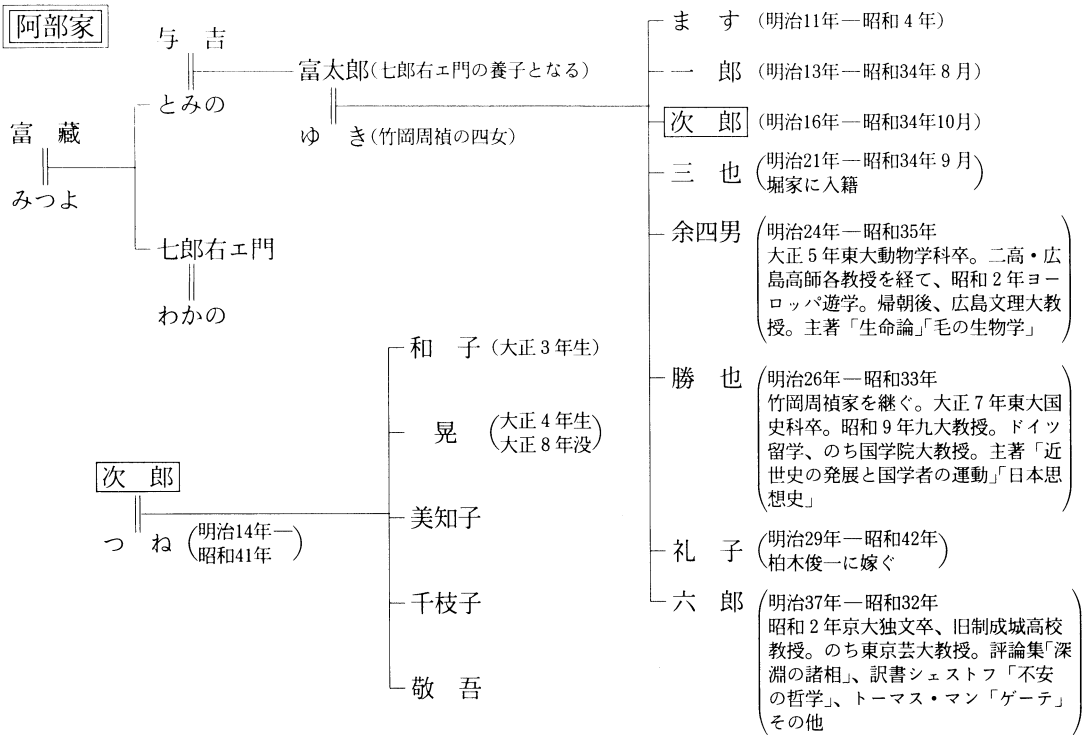
阿部 美知子
(次郎次女)

阿部 恒(次郎妻)

阿部 富士男
(余四男長男)

阿部 八重
(余四男妻)

系 図⁵³⁾



- 1) 1883～1958, 『阿部次郎全集』全17巻、昭和35年-昭和41年、角川書店。
- 2) 同上書 第一巻(『三太郎の日記』) pp. 228～230.
- 3) 新関岳雄著『光と影—ある阿部次郎伝』昭和44年、三省堂。
- 4) 1850～1935, 竹岡周禎、きよのの長女。阿部七郎右エ門と結婚。系図(p. 200) 参照。わかのはキリスト教信仰を持っていたが、受洗していない。
- 5) 『阿部次郎全集』第一巻(『三太郎の日記』) p. 21.
- 6) 1860～1898, 系図(p. 200) 参照。
- 7) 1867～1918, 系図(p. 200) 参照。
- 8) 系図(p. 200) 参照。
- 9) 1878～1929, 阿部富太郎、ゆきの長女。系図(p. 200) 参照。本書簡筆者。夫、加藤儀藏、その母を病床受洗、子供たちを受洗に導く。山寺に帰郷すると、キリスト教信仰に立って、弟、六郎(1904～1957、元東京芸術大教授、病床で受洗、終油の秘蹟をうける)、甥、襄((注15) 参照)を相手に大いに宗教について議論をした。(ますの三女、釜田徳子の証言)
- 10) 系図(p. 200) 参照。
- 11) 1888～1954, 陸軍大学卒。熱心なカトリック。パリ・ミッシェンのフロジャック神父および大越神父と親交があった。
- 12) 系図(p. 200) 参照。
- 13) 系図(p. 200) 参照。
- 14) ますの四女。
- 15) 1907～1980, 元山形大学農学部教授。阿部家後継者。
- 16) 1899～1982, 熱心なカトリック。
- 17) 1910～ 熱心なプロテスタント。
- 18) 徳子の父、加藤儀藏の病氣療養のため、幼児期、徳子はわかのに引き取られ、山寺で育てられ、また学生時代などもしばしば曾祖父母七郎エ門、わかのものに帰った。
- 19) 阿部次郎夫人、カトリック。
- 20) この書簡の筆者、加藤ますや阿部次郎の妹。
- 21) p. 199 参照。新関岳雄著、『若き日の阿部次郎』によれば、大正8年4月20日撮影。
- 22) 阿部わか。「次郎たち兄弟にいろいろの話を聞かせた」(新関岳雄著、前掲書、p. 20.)
- 23) 前出の写真にある4人の兄弟。次郎 三也、余四男、勝也、および、その夫人。阿部家系図、p. 200 参照。
- 24) 系図(p. 200) 参照。
- 25) 1891～1960, 元広島文理大学教授。
- 26) 1893～1958, 元九州大学教授。
- 27) 系図(p. 200) 参照。
- 28) 次郎の長女。
- 29) 堀三也長女。後に、修道院に入る。
- 30) 堀三也次女。後に、修道院に入る。
- 31) 次郎の次女。
- 32) 次郎の長男。
- 33) 余四男の長男。
- 34) 竹岡勝也、阿部余四男の夫人たちの母。
- 35) 加藤儀藏、ます夫婦は神戸に住んでいた。
- 36) 山形市。阿部一郎の住居所在地。
- 37) 日本キリスト教会神戸湊川教会。
- 38) 礼子の縁談の相手。
- 39) ますの義母。夫、加藤儀藏の母。
- 40) 夫、加藤儀藏。
- 41) 七郎右エ門、わか。元来、大伯父母に当たるが、富太郎が七郎エ門の養子となったので、七郎エ門、わかのは次郎兄弟、姉妹たちの祖父母となる。
- 42) 富太郎、ゆき。
- 43) 系図(p. 200) 参照。
- 44) 一郎夫人。

- 45) 三也夫人。
- 46) 余四男夫人。
- 47) 勝也夫人。
- 48) 山寺の隣り町。のちに山寺と合併して現在は「松山町」。
- 49) 阿部一郎夫人の実家。
- 50) 阿部の本家。
- 51) ますの次女。
- 52) この4行は、原書簡では冒頭の余白に追記されている。
- 53) 新関岳雄著、『光と影—ある阿部次郎伝』 pp. 264～265。